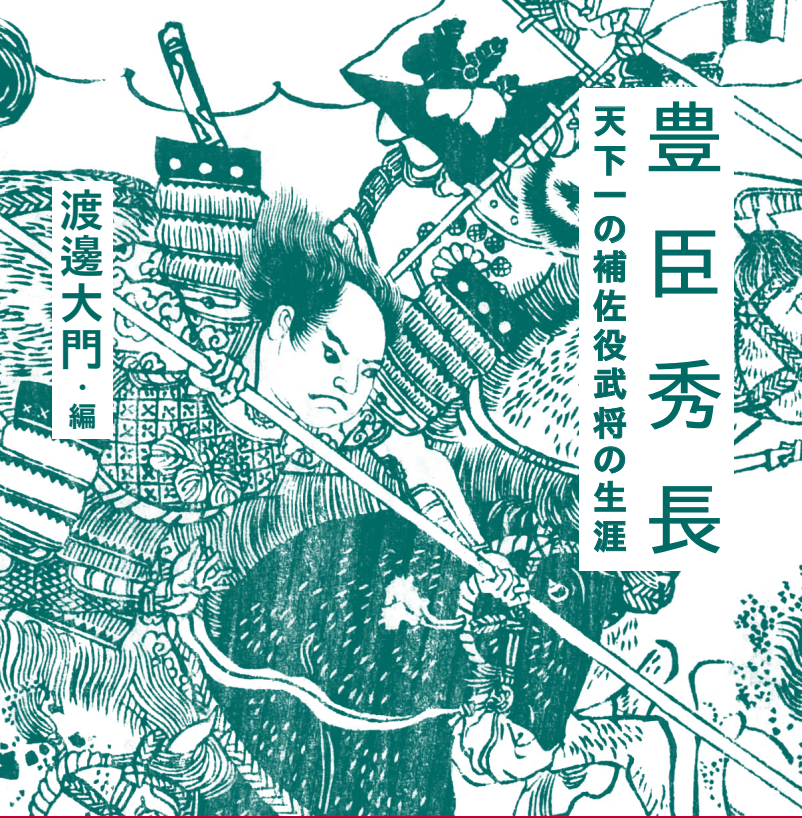




豊臣秀長

天下一の補佐役武将の生涯

渡邊大門・編

秀吉がもっとも
信を置いたのは

出自
合戦
領国支配
城づくり
家族

弟
新研究
だった

血を分けた兄弟はいかに豊臣政権を築き上げたか？

豊臣秀長

天下一の補佐役武将の生涯

渡邊大門・編

星海社

357



SEIKAISHA
SHINSHO

はじめに

豊臣秀吉は、我が国の歴史上で圧倒的な存在感を示す傑物の一人である。一介の農民から身を起こし、天下人まで上り詰めた稀有な人物でもあった。秀吉の関連史料は膨大な数に上り、その研究も同様である。

一方で、秀吉の唯一の弟である秀長は、名前こそ知られているかもしれないが、その生涯に関してはあまり詳しく知られていないだろう。秀吉と比較すると、秀長の関連史料は極めて乏しく、それは研究についても同じである。極言すれば、秀長は謎の人物といえるのかもしれない。

とはいえ、秀長は秀吉が登場する小説やテレビドラマにおいて、欠かすことができない存在である。秀長は独裁者で暴走気味な秀吉のもとにあって、冷静沈着に兄を支える姿で描かれることが多い。秀長は秀吉より先に亡くなったので、「秀長が長生きしていたら、豊臣政権はもっと長く続いたかもしれない」と言われることがある。それは仮定の話であっ

て、実際にはわかるはずがない。

本書は、執筆者が分担して、秀長の生涯を論じたものである。出自や家族構成はもちろんのこと、豊臣政権下においていかなる役割を果たしたのかなどを取り上げた。秀長による領国支配、居城とした城郭、出陣した合戦のことなど、テーマは多岐にわたっている。いかに秀長の史料や研究が少ないとはいえ、内容は盛りだくさんである。

秀長を研究するには、どれだけの史料が残っているかがカギになる。近年になって名古屋市博物館編『豊臣秀吉文書集全九巻』（吉川弘文館）が刊行され、研究の環境はずいぶんと良くなった。同時に、地方自治体史の史料編も続々と刊行され、かつてよりも史料収集の便が図られている。

秀吉や秀長が生きた時代は激動の時代であり、それはちょうど現代と似通っている。歴史の荒波の中で、いかにして秀吉・秀長兄弟が豊臣政権を築き上げたのかを知ることが、私たちにとても大いに参考になろう。

本書は最初から通して読んでいただいても結構だが、各章が独立しているので、ご興味のある章から読んでいただいても構わない。本書を通して、豊臣秀長への認識を深めていただけると幸いである。

目次

はじめに 3

第1章 秀長の父母・兄弟姉妹をめぐる謎 跡部蛮 15

家族との関係性 16

兄秀吉の出生の謎 18

異父説から同父説へ 21

秀長の母と姉妹 24

大政所の密通説 29

第2章 秀長の中国経略と但馬支配 渡邊大門 33

秀吉・秀長の中国経略 34

第3章

秀長の紀伊支配 新谷和之 53

三木城、長水山城の攻防戦 36

鳥取城の兵糧攻め 39

備中高松城の水攻め 41

秀吉・秀長による但馬平定 43

元春の但馬侵攻 45

秀長が行った但馬支配 47

但馬支配の実像 49

紀伊の近世を拓いた豊臣兄弟 54

秀吉の紀州攻め 55

熊野一揆の鎮圧 57

検地の実施 58

北山地方での一揆 60

第4章

和歌山城の築城 新谷和之 69

和歌山のルーツは秀長にあり？ 70

築城の前史 70

秀吉の命により築城 72

「和歌山」のネーミング 73

築城に携わった人々 74

城代の桑山重晴 75

重晴、城代から城主へ 76

豊臣期和歌山城の様相 77

熊野での材木調達 62

兄弟間のすきま風 64

熊野三山への関わり 65

紀州勢の軍事動員 66

石垣石材の移り変わり 79

転用石を含む石垣 80

二つの登城路 82

和歌山城の外郭 83

吉川平介の湊城 84

鷺森の都市形成 85

第5章

秀吉の四国出兵と豊臣秀長

須藤茂樹 89

秀吉の四国出兵と秀長の役割とは？ 90

秀吉の信長路線の継承と四国攻め 90

紀州攻めから四国出兵へ 92

秀長、四国出兵準備 94

秀長、いよいよ四国へ出兵 95

秀長、阿波の諸城を攻める 96

第6章

秀長の大和支配 秦野裕介 111

秀長、元親と和睦交渉へ 101

元親降伏 102

戦後処理と秀長 104

四国平定の意義と秀長 106

羽柴秀長の大和入り 112

秀長入国以前の大和国 113

秀長の大和郡山入部 115

多武峰移転計画 117

その後の多武峰 119

郡山への商業の移転 121

奈良借 122

大和大納言豊臣秀長の死と豊臣政権の落日 125

第7章 郡山城の築城 山川均 129

郡山城の歴史と変遷 130

城郭の全体像と戦略的設計 131

中枢部の縄張りとは機能 132

城下町の繁栄と都市計画 133

「箱本十三町」と住民自治 135

第8章 秀長と九州征伐 光成準治 141

九州停戦命令と秀長の役割 142

宗麟の上坂 143

九州征伐の開始と和睦工作 145

九州への渡海 147

島津勢との交戦 149

島津氏の降伏 151

戦後処理 152

東九州の統括者①島津氏との関係 154

東九州の統括者②島津氏以外との関係 156

秀長の死 158

第9章

豊臣政権における秀長の立場と役割 柴裕之

161

秀吉の“弟”としての歩み 162

秀吉の天下人への飛躍と秀長の活躍 164

豊臣政権における秀長の地位と官位 167

羽柴家一門衆筆頭の執政 170

秀長の実像と死去による影響 174

第10章

秀長の妻子 山崎善弘

179

豊臣政権と秀長家の位置づけ——なぜ「妻子」を扱うのか 180

秀長の正室・慈雲院——史料に残された影 181

光秀尼（お藤）の伝承とその検証 184

秀長の子女——智勝院（お岩）と大善院（おきく） 186

与一郎と仙丸（藤堂高吉）——消えた直系男子と養子のゆくえ 189

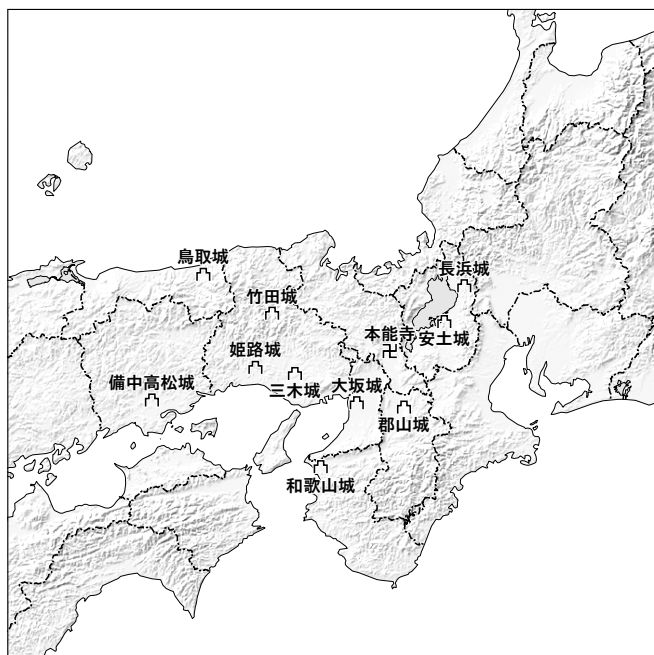
養子・秀保の後継と限界——豊臣家直系としての意義と重責 191

秀保と秀長娘の婚儀——形式的婚姻と家格維持の戦略 193

豊臣一門の中の秀長家 195

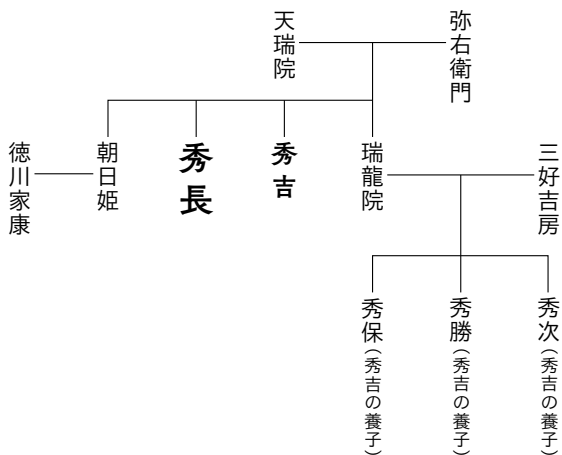
一門大名の家族像を捉え直す視点 196

おわりに 202

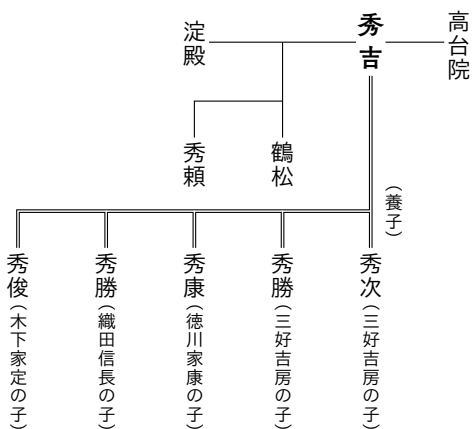


秀吉・秀長関係地図

〔豊臣家略系図①〕



〔豊臣家略系図②〕



豊臣家略系図①②

第1章

豊臣秀長の 父母・兄弟姉妹 をめぐる謎

跡部 蛮（あとべ・ばん）

一九六〇年大阪市生まれ。佛教大学大学院文学研究科博士後期課程修了。博士（文学）。歴史研究家（日本史全般）。古地図を持って町歩きする「江戸ぶら会」も主宰。

主要業績：『今さら誰にも聞けない 天皇のソボクな疑問』（ビジネス社、二〇二五年）、『明智光秀は二人いた！』（双葉社、二〇一九年）など。

家族との関係性

秀長の生年は、江戸時代末期に編纂された『系図纂要』の「豊臣氏系図」、奈良興福寺の僧が書いた『多聞院日記』などからみて、天文九年（一五四〇）とみて間違いない。問題は、秀長の父母や兄弟姉妹らとの関係性だ。まず、父母・兄弟姉妹を史料や系図などから拾ってみると、次のようになる。

- 父Ⅱ 筑阿弥（竹阿弥）もしくは木下弥右衛門。
- 母Ⅱ 大政所。
- 兄Ⅱ 豊臣秀吉。
- 姉Ⅱ 瑞龍院（関白秀次の生母）。
- 妹Ⅱ 南明院（徳川家康室）。

兄秀吉の生涯についてはあらためて述べるまでもないので省略する。残る母と姉妹の略歴は後述するとして、まず父が筑阿弥と木下弥右衛門の両説あって定まっていないことが問題だ。これはまた、兄秀吉の実父を誰にするかという件ともかわり、ただ秀長一人の

問題にとどまらず、豊臣家のルーツにつながるテーマでもある。秀長と秀吉の実父を誰にするかという組み合わせによってその関係性が変わってくる。

(a) 秀吉と秀長ともに実父を弥右衛門とした場合

Ⅱ 秀吉と秀長は**同父同母**の兄弟。

(b) 秀吉の実父を弥右衛門、秀長の実父を筑阿弥とした場合

Ⅱ 秀吉と秀長は**異父同母**の兄弟。

(c) 秀吉と秀長の実父も筑阿弥とした場合

Ⅱ 秀吉と秀長は**同父同母**の兄弟。

このうち (b) は秀吉と秀長を種違いの兄弟とする説、(a) と (c) は父も同じくする兄弟説ということになる (秀吉の実父を筑阿弥、秀長の実父を弥右衛門と組み合わせる史料はないので除外した)。

果たしてどれが正しいのだろうか。

兄秀吉の出生の謎

まずは兄秀吉の実父を誰にするのかについて考えてみよう。

秀吉の実父を筑阿弥としたのは、儒学者の小瀬甫庵が江戸時代の初めに書いた『太閤記』。秀吉が織田信長へ仕官を直訴した際に「父は織田大和守（尾張下郡守護代）に仕えた筑阿弥入道で尾張愛智郡中村（名古屋市）の住人です」とみずからの出自を語っているためだ。こうして秀吉は「筑阿弥の子だから」という理由で信長に小筑と呼ばれたという。

また、秀吉の正室北政所（高台院）の出生地とされる尾張国朝日村（愛知県清須市）の住人柿屋喜左衛門の祖父が聞き取った話を書き留めた『祖父物語』では秀吉の父を「竹アミ」とし、「信長公同朋衆」だとする。同朋衆というのは足利将軍や大名らに仕えて雑事や諸芸能に携わった法体ほったいの者。筑阿弥が尾張守護代か、信長（守護代配下の奉行の家柄）のいずれに仕えていたかの差はあるものの、いずれも秀吉の実父を筑阿弥としている。

これに対して『太閤素性記』には別の話が記され、秀吉の父は信長の父信秀の鉄砲足輕だった木下弥右衛門だとする。合戦で傷を負い、体の自由がきかなくなって故郷の中村で百姓として暮らし、同じ尾張の御器所村ごきそ（名古屋市）出身の大政所との間に瑞龍院と秀吉をもうけたが亡くなってしまふ。結果、大政所は中村出身で信秀の同朋衆だった竹阿弥を

婿に迎え、男児（秀長）と女兒（南明院）が生まれたという。そうして「竹阿弥のせがれ」という意味で秀長は幼時に小竹と「アダ名」されたとある。「筑阿弥Ⅱ竹阿弥」だから、実父の一字をとって幼時に小竹と呼ばれていたのは秀長だったことになる。つまり、秀吉と秀長は異父同母、種違いの兄弟になるわけだ。

作者とされる土屋知貞は江戸幕府の旗本ながら、養母が中村の代官の娘で、その養母からの聞き語りをもとにまとめたと思われる。したがって、『太閤記』などより内容に信頼がおけるという評価になっている。

しかも、『老人雑話』に記載される逸話が『太閤素性記』の内容を補強することになった。『老人雑話』は、江戸時代初めの儒医江村専斎の談話をその門人が筆録してまとめた随筆。そこには、賤ヶ岳の合戦（滋賀県長浜市）の際の逸話が語られている。この合戦は、山崎（京都府大山崎町）で明智光秀をやぶった秀吉が天下統一へ向けて大きく踏み出すことになる一戦でもある。

秀吉は湖北の最前線の大將を秀長に託して岐阜城に拠る柴田勝家陣営の織田信孝を攻め、大返しで勝利するものの、留守を預かっていた秀長が柴田勢の猛攻を受けて配下の中川清秀を見殺しにしたことに、諸將の前で怒りをあらわにし、「身（秀長）と種違ったり」、つ

まり、「おぬしとわしでは種が違うのでこういう結果になったのだ……」と罵倒したわけだ。この逸話と『太閤素性記』の内容から、一時、秀吉と秀長は実父が異なる兄弟だという(b)説が一般化したといっているだろう。

一九九六年放送のNHK大河ドラマ『秀吉』（秀吉役＝竹中直人、秀長役＝高嶋政伸）はこの説にもとづき、秀長は秀吉と異父同母の兄弟という設定で放送されていた。

そもそも秀吉の実父については、その軍師とされる竹中半兵衛重治の子重門が書いた『豊鑑』に「あやしの民の子なれば、父母の名も誰かは知らむ」とあり、実際のところ、その実父を誰にするかは定まっていけないといってもいい。秀吉が出世していくにつれ、正室北政所や母大政所の縁者を仕えさせるのに対し、秀吉の父が筑阿弥であれ、弥右衛門であれ、父の縁者を家臣にしたという話はあまり聞かない。

秀吉が御伽衆の大村由己に書かせた『関白任官記』にもその父の名は登場せず、母が禁中（内裏）に仕えた際に身ごもり、秀吉が高貴な者の落胤であるかのような印象を植え付けている。おそらく、実父が誰なのか当時からよく知られていない事情に乘じ、由己にそのルーツを捏造させたのだろう。このほか秀吉のルーツについて書かれた史料では『武功夜話』が「村長の倅」という富農説、南蛮人宣教師ルイス・フロイス著『日本史』には「貧

しい百姓の倅」という貧農説と、同じ百姓出身説ながら両極端な記述がみられる。

こうした状況下、実父の名を記した『太閤記』『祖父物語』（筑阿弥）、『太閤素性記』（木下弥右衛門）は貴重な史料と位置付けられ、その二者択一を迫られる形となつて、そのうち、『太閤素性記』の内容が支持されて秀吉の実父を木下弥右衛門とするのが通説になったといえる。

異父説から同父説へ

しかし、秀長の実父について秀吉と異父同母だとする『太閤素性記』説への反論はかねてより存在していた（桑田…一九七九）。

その根拠は「瑞龍寺差出」の中の系図にある。瑞龍寺は、秀吉と秀長の姉（瑞龍院Ⅱ日秀尼ともいう）が息子たちの菩提を弔うために京の今出川村雲に建立し、現在は滋賀県長浜市の八幡山に移築されている日蓮宗寺院。そこが差し出した系図に瑞龍院の父の法名が「妙雲院殿榮本」と記され、「天文十二年癸卯一月二日逝去」となっている。

天文十二年は前出の「豊臣氏系図」などで確認できる秀長の生年（天文九年）より三年あと。法名だけではこの「妙雲院」が筑阿弥なのか、それとも木下弥右衛門なのか、ある

いはその二人は同一人物なのかは判別しかねるものの、もしも俗名不詳の「妙雲院」を弥右衛門だとしたら、彼の存命中に秀長が誕生しているため、秀吉・秀長ともに弥右衛門を父とする同父兄弟が正しく、種違いではなかったことになる。つまり、(a)説が浮上してくるわけだ。

しかも、「妙雲院」の没年が通説でいう鉄砲伝来の年(天文十二年)にあたることが『太閤素性記』の信憑性を疑わせることになった。

この鉄砲伝来の年は一年さかのぼる可能性がでているほか(中島…二〇〇五)、当時、中国人の海賊王直が倭寇と称し、五島列島や平戸を拠点に東シナ海で密貿易に携わっていることから、王直が五島列島を拠点にした天文九年(一五四〇)ごろにそのルートで日本に鉄砲が伝来していたといえなくもない。ただそうであったとしても、鉄砲が普及するのはだいぶ後の話だから、通説が鉄砲伝来の年とする天文十二年の時点で木下弥右衛門が鉄砲足軽になっているという話は史実とは認められない。その意味では『太閤素性記』の記述をすべて鵜呑みにするわけにはいかないのである。すなわち、秀吉と秀長の実父が異なるという前提が崩れるのだ。

また、「妙雲院」の俗名を弥右衛門と筑阿弥のいずれともせず、不明ということにしたと

しても、秀吉と秀長の二人は実父を同じくする事実を指し示すことになる。というのも、「瑞龍寺差出」は二人の姉の瑞龍院が建立した寺の史料なのだから、そこに記載される俗名不詳の「妙雲院」が彼女の父であるのは間違いない。一方、秀吉の生年は「豊臣氏系図」「太閤素性記」「祖父物語」などによると天文五年（一五三六）の申さるの年、『関白任官記』にもとづくと天文六年（一五三七）の酉との年となるものの、その秀吉も、天文九年生まれの秀長も、「妙雲院」が没する天文十二年より前に生まれているため、大政所が夫以外の男性と密通した可能性を除くと、二人は瑞龍院とともにいずれも「妙雲院」と大政所の間の子だと考えられる。

秀吉が秀長を種違いだとして罵倒した話が掲載される『老人雑話』は、秀吉関係の逸話について他の史料にない内容を盛り込んでいるものの、逆にいうとその話の信憑性が問われるところである。

以上、ここまで秀吉と秀長が同父か異父かどうか縷々述べてきたが、それは秀長という人物を検証する上において重要なポイントだと考えられるからだ。なぜなら秀長は「兄の分身」（小和田…二〇二四）などという視点が提示され、兄を天下人にした「ナンバー2」の役割が強調されているからだ。

後年の話だが、九州豊後の大友宗麟が薩摩の島津に攻め込まれ、天正十四年（一五八六）四月、関白の秀吉に泣きついた。結果、翌年に秀吉は島津征討の軍勢を催すのだが、宗麟が秀吉に直訴するために大坂城へ来た際に国元へ宛てた有名な書状が残っている（『大友史料』）。

その書状の中で秀長が宗麟の手をとり、「内々の儀は（千）宗易、公儀の事は宰相（秀長）が承るのでご安心なされよ」と言ったと記している。

つまり、豊臣家の「内々の儀」は千宗易（利休）、「公儀の事」は宰相である自分が任されていると秀長が宗麟にそう語ったわけだ。「公儀の事」を任されているというのだから、秀長が多忙な関白秀吉の名代として天下の政治を代行していたとまではいえないまでも、大きな役割を担っていたことになる。このため秀長は、兄秀吉の名補佐役として語られるのである。やはり、同父同母の兄弟でないと、秀吉も秀長に大事を任せられなかったのではなかろうか。

秀長の母と姉妹

① 母大政所

摂政関白家の当主の妻を「北政所」と称し、母を「大北政所」と呼んだ。大政所はその略称である。

しかし、出自は謎につつまれ、『関白任官記』には萩の中納言という貴族の娘で父が尾張に配流された後に許されて宮中で仕え、ふたたび尾張にもどって秀吉を産んだことになっているが、この出自説は否定されている。『太閤素性記』は尾張御器所村、江戸時代半ばに成立した説話集『明良洪範』めいりようこうはんは尾張曾根村（愛知県一宮市）の農民の子としている。

「豊臣氏系図」によると文禄二年（一五九三）七月二十五日に八十歳で死去しており、逆算すると二十三歳か二十四歳で秀吉を、二十七歳で秀長を産んだことになる。

天正十四年（一五八六）、秀吉が徳川家康と講和を結ぶにあたり、当時家康の正室となっていた娘の南明院に会うため徳川方の岡崎に入ったが、これは家康を懐柔するために事実上秀吉が生母を人質とする策だったという話はよく知られている。

秀吉の関白任官に伴い、従一位に叙される。

秀吉の朝鮮出兵には反対でその心労のほか、秀長や南明院に先立たれたこともあったのだろう。朝鮮出兵中の秀吉が本営としていた肥前名護屋（佐賀県唐津市）で母危篤の知らせ

を受け、京の聚楽第（豊臣政権の政庁）へ駆けつけたものの、臨終に間に合わなかった。法名（院号）は天瑞院。

（2）姉瑞龍院

「豊臣氏系図」に名を智子と記される。没年から逆算すると天文二年（一五三三）生まれで、秀長の七歳年上。三好吉房を夫とし、秀次・秀勝・秀保の三人の兄弟の母となる。長男の秀次はのちの関白。次男の秀勝は秀吉、三男の秀保は秀長の養子である。

夫の吉房もまた謎多き人物だ。長男の秀次が三好康長の養子となったために三好の氏を称しているものの、その出身には諸説ある。そのうち、尾張海東郡乙之子村（おとのこ愛知県あま市）の百姓弥助が有力視されている。

ただ、こういう逸話も残る。秀吉が信長に仕え、まだ木下藤吉郎と名乗っていた時代の話だ。信長の美濃攻めの際、馬に乗ることを許された藤吉郎は、乙之子村で綱差（つなざし鷹匠の下役）をしている弥助のところへ行き、雑役に使う馬を借りた。しかし、その馬には鞍はあっても鐙はない。弥助はこれで馬に乗せるのはどうかと思いつつも藤吉郎の供をし、そのまま仕えることになったという（『祖父物語』）。

のちに秀吉は秀次に尾張を与え、東の家康に備えさせるが、関白として聚楽第で政務をとった秀次に代わり、父の吉房は犬山城主として秀次の居城清洲城を預かり、尾張の政治を担った。ところが、秀次切腹事件に連座した形となって配流される（秀吉の死後赦免）。

一方、瑞龍院も秀次切腹の一年後の文禄五年（一五九六）、出家して菩提寺を建立。それが瑞龍寺である。その寺号は後陽成天皇から賜っている。

彼女にとって不幸だったのは、弟の秀吉の養子とした次男秀勝が朝鮮出兵の際に戦地で病死し、秀長の養子となった三男の秀保も、兄秀次が七月に切腹する直前に変死していること。つまり、彼女の出家は悲運な最期を遂げた三人の息子たちの死が大きく関係し、赦免された夫吉房とともに息子たちの菩提を弔っていくのである。「豊臣氏系図」によると、彼女は江戸時代の寛永二年（一六二五）四月二十四日まで生き、九十二歳の長寿をまとうした。

（3）妹南明院

「豊臣氏系図」によると、天正十八年（一五九〇）正月十四日に四十八歳で没したとある。『太閤素性記』では秀長とともに竹阿弥の子としている。木下弥右衛門を実父とする瑞龍

院・秀吉とは異父同母の関係と説明されているものの、その生年から秀長と同じ理由で瑞龍院・秀吉と同父同母と考えられる。

南明院は天正十四年（一五八六）、当時正室不在だった徳川家康との講和を図る秀吉によって夫と離別させられた悲劇のヒロインとして語られることが多い。秀吉の家臣だった夫は主命に従わざるをえず、知行五百石の加増という離縁の代償を固辞し、妻と別れた後、出家もしくは自害したというのが通説だ。南明院は家康の室となり、駿府に住んで駿河御前（朝日姫・旭姫・朝日の方）と呼ばれた後に病死する（渡辺…一九一九）。南明院はその法名（院号）である。

ただし、秀吉によって離別させられたとする夫の名は「副田そえだ甚兵衛」「副田吉成」「佐治日向守」と定まらず（黒田…二〇三三）、江戸時代の儒学者で兵学者の山鹿素行はその著『武家事紀』において副田甚兵衛が「信長公逝去の時」に秀吉の不興を買って離縁させられたと記し、離縁の時期を本能寺の変のあった天正十年（一五八二）だとしている。だとすると家康への再嫁が離縁の原因でなかった可能性が浮上する。

大政所の密通説

秀長と兄秀吉との関係について筆者の結論をまとめるところなる。

鉄砲伝来の年の件もあつて『太閤素性記』の秀吉の実父を木下弥右衛門とする内容には疑問が残るものの、いまのところ、「弥右衛門＝秀吉実父」説を明確に退けるだけの理由はなく、「瑞龍寺差出」にしたがい、(a) 説(秀吉と秀長ともに実父を弥右衛門とする同父同母説)としておきたい。すなわち、「妙雲院」の俗名を木下弥右衛門とする解釈である。ただし、弥右衛門が「木下」という名字をもっていたかどうかは諸説あり、そもそも氏を名乗る家柄ではなく、秀吉の正室北政所の実家(杉原氏)の本家が木下と称し、それを秀吉がのちに借用したという説もある(桑田…一九七九)。

しかしながら、秀吉と秀長の実父を弥右衛門とする考えには問題がなくはない。『太閤素性記』に、弥右衛門が合戦で傷を負い、体の自由がきかなくなつて故郷の中村で百姓として暮らしていたとあるからだ。「妙雲院」の没年が天文十二年だから、彼は秀長が天文九年に生まれた三年後に亡くなっている。秀吉は天文五年もしくは六年生まれだからまだしも、亡くなる三、四年前に、負傷していた「妙雲院」に果たして妻と同衾する気力が残っていただろうか。大政所が「妙雲院」存命中、夫とは別の男性と密通し、その男性との間に秀

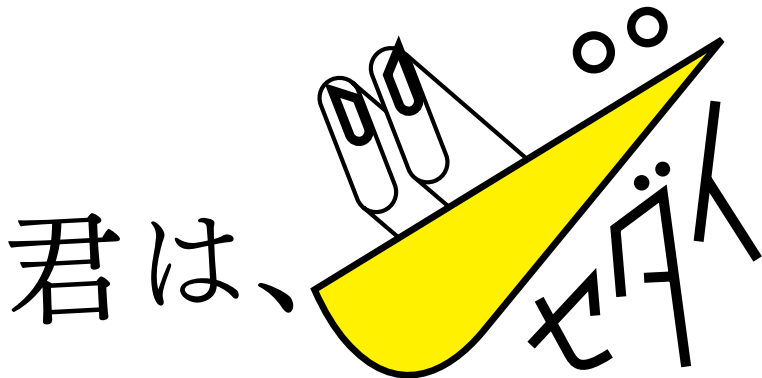
長と南明院が生まれた可能性はないのだろうか。

じつは大政所が不特定の男性と関係をもった疑いが指摘されているのである（北川…二〇二三）。ルイス・フロイス著『日本史』にそうと思わせる記述があるからだ。

天正十五年（一五八七）、一人の若者が豪華な衣装に身を包んだ武士たちを従え、大坂城にやって来て、「関白（秀吉）の実の兄弟」だと主張した。秀吉が母の大政所にその事実を問いただしたところ、その若者を「息子として認知することを恥じ」、彼女は「そのような者を生んだ覚えはない」と言い渡したという。こうして若者と従者らは秀吉の面前で斬首させられた。フロイスが記載した内容から察すると、彼は大政所が嘘をついているという前提に立っていると考えられる。大政所の隠し子とされる若者についてとくに「彼を知り多くの人々がそれが事実で間違いない」とフロイスがしていることから、その若者が大政所の実子で、それこそ秀吉・秀長と種違いの兄弟であった疑いは残る。

さらに『日本史』によると、この事件の三、四ヶ月後、尾張に秀吉の姉妹がいるという話が秀吉の耳に入り、わざわざ彼女らを京へ呼び寄せ、捕らえて首を刎ねたというのだ。

こうして秀吉の父について『太閤素性記』でいう弥右衛門、『太閤記』でいう筑阿弥以外の男性である可能性が想定されるに至るわけだが（北川…二〇二三）、だとすると、こういうケ



何と闘うか？
<https://ji-sedai.jp>

「ジセダイ」は、20代以下の若者に向けた、
行動機会提案サイトです。読む→考える→行
動する。このサイクルを、困難な時代にあっ
ても前向きに自分の人生を切り開いていこう
とする次世代の人間に向けて提供し続けます。

メインコンテンツ

ジセダイイベント

著者に会える、同世代と話せるイベントを毎月
開催中！ 行動機会提案サイトの真骨頂です！

ジセダイ総研

若手専門家による、事実に基いた、論点の明確な読み物を。
「議論の始点」を供給するシンクタンク設立！

星海社新書試し読み

既刊・新刊を含む、
すべての星海社新書が試し読み可能！

マーカー部分をクリックして、「ジセダイ」をチェック!!!

行動せよ!!!